
いつでも君が

モロッコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつでも君が

【Nコード】

N06540

【作者名】

モロツコ

【あらすじ】

だいぶ恒例になってきました、オオカミさんシリーズです。

今回は涼子×亮士で亮士君のプロポーズ話です。

涼子さん目線で、寂しさと恥ずかしさを表現してみました。

駄文ですが、お付き合い願います。

（前書き）

駄文ですが、お付き合い願います。

いつでも君が、きつとそばにいてくれる。
思い出して、その名前を。

心を深く閉ざして、何も見えない夜の時も。
きつときつと。

君がいてくれると、信じているから。

君と出会った街を離れても、たとえどんなに遠く離れたとしても。
忘れないで。

あの街の風、みんなとの思い出。

いつでも君が、きつとそばにいてくれる。
そう、きつと君がそばにいてくれるんだ。

私達は今、肩を並べて歩いてはいない。

私はこの御伽花市に残り、君は田舎でまたぎの祖父を継ぐと言った。
私がそれを止める権利など、あるわけなどあるわけもなく。
君の後ろ姿を、ただ遠くなるまで見つめるしかなかった。

ただ君は別れ際、最後の言葉を残したんだ。

「大丈夫ッスから。」

君の言葉が、いつも心に響いてる。
今は、一緒じゃないけれど。

きっと君は、いつもの笑顔で隣にいてくれることを信じているから。

そのわずかな奇跡を、願っていたある日――

「あ、雨――」

いつもの道を、ただ一人で歩き続けていた時のこと。
りんごは一足先に行く所があると、先に学校から帰ってしまい、私は一人で歩いていた時のことだった。

最初は小さな粒だった。だが、時がたつにつれ、雨は次第に強さを増して行った。

このままだと風邪をひいてしまう。

いつもなら君が隣で傘をそっと、照れくさそうに渡してくれるのだけれど。

その君は今、私の隣にはいない――

そう思ったら、雨よりも先に涙がこぼれてきた。
いつでも君が、側にいてくれたのに。

私の愛しい声で、名前を呼んでくれていたのに――

その君は、今いない――

羊飼との争いは一旦終わったけれど、その灯は消えてはいなかった。今でもたまに、私の前に現れては薄ら笑いを浮かべ、「また裏切られたね」と言ってくる。

怖かった。君が隣にいないと、怖くて立っていることが精一杯だった。

見えない。この男との因縁の糸が消える光が見えない。

そんな時は、君の言った最後の言葉を耳を澄まして思い出す。

そうすると涙も怖さも、いつかは消えて行つて安心感を覚えるのだ。でもまだ、怖いものは怖くて。本人が目の前にいると、足が震えて声がでなくなってしまう。

君が隣で、大丈夫と声をかけて。

君が隣で、につこりとほほ笑んでくれて。

君が隣にいてくれれば、それでいいのに――

「会いたい、会いたいよ――」

雨に打たれる。

その雨に加勢するように風も吹き荒れる。

会いたい、君に。

「亮士——」

「…なんスか、涼子さん。」

「…え？」

夢にまで見た、いつもの頼りない笑顔が現実の今、目の前に現れた。いつもずっと、会いたいと思っていた愛しい人が、そこにいた。

「な、なんでここに——」

「会いたくて、涼子さんに。」

私が言い終わる前に君は、私のことを抱きしめてきた。

こんな状況に直面したことのない私は、今にも殴りそうだったけどあまりにも君が強く抱きしめるものだから、力が全部抜けてしまった。

「突然現れて、それはずるいぞ——」

「すみませんッス。」

けど、ホントに会いたくて…」

「・・・いい。」

「へ？」

「帰って来てくれたから、今回は許す。」

「ははっ、ありがとうございますッス。」

君は私の顔をまじまじと見、にっこりとほほ笑んだ。

「5年で、ずいぶん様変わりしたッスね。」

「そうか？俺はそんな気はしないけど。」

そんな事はなかった。

私は、いつ君に逢えても大丈夫のように、こうして毎日着飾って過
ごしてきたのだから。

「今の涼子さん、可愛すぎるッス・・・」

「そ、そこまで言われると恥ずか——！！」

また君は、私が言い終わる前に言葉を遮った。
今度は私の唇を、君の唇で。

「今度はもう、涼子さんから離れないツスから。」

「ち、ちゃんと言葉で言えよ!!」

「ほら、言葉で言つとなんか照れますし…」

「こっちの方が十分恥ずかしいわ!」

「ほら、とりあえずここに入るツス。」

そっいつて君は私をかさに招き入れ、家まで送ってもらつことにした。

「涼子さん。」

「ん?」

「俺のこと、覚えていたツスカ?」

互いに歩幅を狭め、ゆっくり歩きながら、とある話をした。

「もちろん。お前のことを忘れたことなんて、一度もないよ。」

「それならなんツスけど…」

これ、受け取ってもらえないツスカ…?」

そっいつて君は、私に小さな箱を渡した。

「…これって…?」

「じいちゃんとはあちゃんには許可は貰ってるッス。
雪女さんも若人さんにも。」

君が照れくさそうにして渡すもんだから、何かと思って開けてみた。
すると、そこには私の指にぴったりはまりそうな指輪があった。

「これ…私に…?」

「そうッス。」

改めて言わせてもらうッス。」

そういつて君は、一息置いて私の目を見て言った。

『俺、森野亮士は。

今、ここにいる大神涼子のことを。

誰よりも、世界中のだれよりも。

愛しています。

俺なんかが言っているのかは分からないけど。

俺の隣で、一生をともしてほしい。』

恥ずかしそうに、でもはつきりとした口調で言った。

その問いに、私は躊躇することなく「はい」と答えた。

5年越しの恋、ここに成就

(後書き)

どうでしたか？何かあれば感想等、ヨロです、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0654o/>

いつでも君が

2010年10月11日00時17分発行